■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

16　中井久夫「ボランティアとはなにか」

●参考　中井久夫『１９９５年１月・神戸』【916/N10/1】（北野高校図書館）
中井久夫『いじめのある世界に生きる君たちへ』【371/NA/】（北野高校図書館）

■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

■目標　書くことでより明瞭に理解する

■追跡

①　阪神・淡路大震災の前の私にとっては、ボランティアとはカンボジアなりアフリカのどこかに出かけていく人たちであった。

筆者は、精神科医。神戸大にいたとき、阪神・淡路大震災に遭った。自分が震災にあうまで、「ボランティアとは、どこか遠くの災厄や困難を助けに行く人たちとしてしか認識していなかった」――そう読み替えて。震災後、何かが変わったことを示唆。さて、どう変化したのか？

②　ずいぶん前だが、ある財団の助成審査委員をしていて、千葉県上総地方に伝わる「上総掘り」という井戸の掘り方をフィリピンとタンザニアに伝授するボランティアの報告会に出た。ビデオを見れば、竹のヒゴをぐるぐる巻いたものを使い、竹の弾力を原動力にして井戸を掘るのである。最新の技術でなしに、こういう「草の根」の技術を伝えること自体に意義があるということであった。確かに感動的な場面であった。

③　日本中に、僧行基が掘った池、だれそれが伝授したおまんじゅう作りの方法などという言い伝えが残っている。上総掘りも、いずれそういう伝承としてその地に残るかもしれない。

「最新の技術でなしに、こういう「草の根」の技術を伝えること自体に意義がある」というのは、例えば、アフガニスタンで用水路をつくる支援をした医師の中村哲さんの考え方とも通じる。現地で調達できる材料と技術で作る、という思想だ。

▼中村哲『医者、用水路を拓く―アフガンの大地から世界の虚構に挑む』、『アフガニスタンの診療所から』【302/N13/1】、『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』【289/N26/1】

④　しかし、これが印象に残ったということは、私にとってボランティアというものが、

やはり遠いものであったことを示していると思う。私は本業のみにいそしむ大方の人と同じであった。決してボランティアを理解していたわけでなく、深く考えたことさえなかった。

「伝承として」印象に残った、ということは、自分たちが実際に使う技術とは切り離して捉えていたことを意味する。

⑤　ところが阪神・淡路大震災である。私が聞いた話では、奈良女子大学では外国からの留学生が早速飛び出していって、はっと気づいた日本人学生が二、三日後にあとに続いたということである。留学生にはボランティアは当たり前のことであった。

⑥　私は当時、災害の中心にある大学医学部精神科の教授だった。気がついてみると、私はボランティアたちの渦の中にいた。精神科医が休暇をとってやってきた。ありとあらゆる層から来た人たちが走り回っていた。私自身も、だれからの指図も受けずに、自分でそのときどきに最善と思うことをしていた。人々の観察と自己観察とから、私はボランティアというものが何かを考えてみる機会を得た。

問いが立った。「ボランティアというものは何か」。ここからが思考の展開。

⑦　私は私なりに理詰めなところがあるから、ボランティアの倫理的根拠というものをたどってみた。私は孟子の「惻隠（そくいん）の情」に行き着いた。「忍びざるのこころ」とも言われるこの情は、孟子の人間性善説の基礎になっている。井戸に落ちようとしている子供を見たときには、だれもがはっとして駆け寄って助けようとする。この、反省意識や理性的判断以前の心の動きに、孟子は人間の本性は善である証拠の一つを見た。

漢文のテキストにもよく出てくる話。ふだんどんな悪いやつでも、井戸に落ちようとしている子どもを見たら、ハッとする。この「ハッ」が、「反省意識や理性的判断以前の心の動き」といわれているもの。理屈以前に、「ヤバっ」と思う。そんな言葉になるより前の、「ハッ」とする本能的な反応に、孟子は人間の「善」の本性を見る。この「ハッ」は、自己の個体保存の欲求とは関係ないのに、人間には、他者の危機を救わなければならないという回路がインストールされていることを示す。ただし、この原始的な「善」は、そのままでは育たない。むしろ逆に、自己中心的な欲望は、〈原始的倫理ＤＮＡ〉の機能を止めてしまう。孟子は、しかしそれは消え去ることはない、と考える。気づけば、育てることができる。孟子にとって学ぶとは、もともとインストールされていたものの機能を取り戻すことを意味する。

ただし、問題は、「ハッ」とすることと、実際に「駆け寄る」ことの間にある大きな溝だ。駅のホームで転落しそうな人を見たとき、駆け寄ることができるか？――と想像すれ

ば、実感が湧くのではないか。

⑧　私にはこういう覚えがある。例えば、乗り物の中で、「この中に医師がいないか」という放送がある。そういうときに感じる何かである。ではすっと立てるかというと、そうではない。専門が違う、だれかが立ってくれるだろう、いまから急ぎの用がある、などなど、こういう言い訳はつねにわいてくる。結局、立たないままでいる口実は必ずあるので、その口実を無視するかしないかが決め手になる。もう一つは、恥をかかないかどうかである。いざ立って役に立たなかったり、間違ったことをしたら恥ずかしいということである。小学校のときに手を挙げて当てられたとたんに答えを忘れてしまった恥ずかしさは、生涯抜けないものだ。

「ハッ」としても、「ためらい」が湧く。これも、誰もが実感することだろう。ためらいの中味とは？　筆者は二つをあげている。①行動しない言い訳・口実②恥ずかしさへの危惧。「もう一つは」に注目して、二点あることを、ささっとチェックせよ。

⑨　ところで、私が思い切って立つと、わらわらと立つ人が出てくる。仲間がいる心強さがあるのだろう。やはり、最初に立つのは、学会で最初に質問するのと同じ、二番手とは違う、大変なエネルギーがいる。

逆にいうと、最初のためらいは、「仲間がいる心強さ」によって乗り越えられる。とすると、このとき人は、行動する根拠を「仲間」に置いているということになる。たとえば、戦争文学で「仲間がいたら、ためらいなく撃つ」という描写がある。これは善とは逆の行為だ。倫理（行為するか否か）の根拠が「仲間」にある＝「みんながやるならやる」という心理は、必ずしも「善」を導かない。

⑩「座視するのに忍びない心」というものは、確かにだれにでもあるのだろうけれども、それが発動するまでには葛藤があるということだ。いじめを見過ごすかどうかになると、その葛藤は大変だ。震災の場合には、返り討ちに遭うということはないし、一人だけということはないけれども、やはり、布団をかぶって寝てしまうか、立って走り回るかを分ける最初の一瞬というものがある。どちらになるかは最初は紙一重であると思う。いったんどちらかに踏み切れば、どんどんそちらのほうに行く。**読解問題1**どうも、そういうふうに人間の心はできているらしい。

読解問題1　「どうも、そういうふうに人間の心はできているらしい。」とあるが、筆者は、このような人間の心の動きをどのようなものとしてとらえているか、まとめなさい。

整理問題。☆参照範囲を確定→箇条書き→書く。参照範囲は⑦⑧⑨⑩。ただし、⑩の前半にまとめられているので、それを軸に。不要な部分をカットすると、

⑩「座視するのに忍びない心」というものは、確かにだれにでもあるが、それが発動するまでには葛藤がある。布団をかぶって寝てしまうか、立って走り回るかを分ける最初の一瞬というものがある。どちらになるかは最初は紙一重である。（しかし）いったんどちらかに踏み切れば、どんどんそちらのほうに行く。

傍線部の三過程を整理すればいい。⑦⑧⑨の内容もこれと重なる。

⑦人間の本性は善である

⑧（しかし、）他者の危機を助けようとするとき、行動しない口実や恥をかかないかというおそれが浮かぶ。

⑨（しかし、）一人が立つと、ためらいは減る。

【解答例】人間には、他者の危機を救おうとする本性があるが、実際に行動するまでは葛藤がある。行動するかしないかは、ごくわずかの差だが、いったんどちらかに決まれば、どんどんそちらの方に進んで行く。

ということは、「布団をかぶって寝てしまう」ほうに転ぶとどんどんそっちに行くということでもある。この**「最初の踏み切り」の問題**は、大きいことでも小さいことでも、いろいろなところで、ポイントとなるだろう。**よい仲間**、というのは一つの、そして、重要な鍵になる。

⑪　周知のように、大震災の中では一種の連帯感、共同体感情というものが存在した。普段の人々の境界が溶け落ちた（メルトダウンした）のである。それはボランティアが、魚が水の中に泳ぐように動ける世界であった。

「ボランティアが、〈魚が水の中に泳ぐように〉動ける世界」とはどんな世界だろう。ここまでの叙述をふまえれば、「仲間がいるので、ためらいなく、思うように、みんなで他者を助ける活動ができる世界」、と翻訳できるだろう。

⑫　これをボランティアに関して「熱い」（ホットな）世界と言おう。この世界にも危険性は潜んでいる。私は、震災直後の熱い世界の中で、フランス革命にせよ、ロシア革命にせよ、革命の初期の高揚はこういうものだったのではないかと思った。この共同体感情を永遠ならしめようという誘惑はまわりまわって「力ずくの永遠化」すなわち恐怖政治につながりかねない、という思いも頭をかすめた。しかし幸いに、被災地のだれもがこれが一

時的であることを直観していた。そして天災は革命よりも人を他罰的にしにくい。

共同体感情を自分たちの経験にひきつけて感じ取っておこう。ある非日常な感覚の中で、ふだんバラバラのひとたちが、共通の目的をめざして（それはみんなが是認している目標）、力を合わせて努力している状態。その努力、行動そのものが、高揚感を生む。

そう、例えば、クラスで文化祭の取り組みを進めているとき。例えば、クラブで、優勝めざして団結しているとき。これらも小さな「熱い世界」といえるだろう。

「共同体感情を永遠ならしめようという誘惑はまわりまわって「力ずくの永遠化」すなわち恐怖政治につながりかねない」という指摘は、ぴんと来ないかもしれない。筆者は、革命という、政治的運動を思い浮かべている。知識として知っておくことは大事だ。熱狂は、一つの「正しさ」をめざすことによって、不可逆に高揚の熱量が増していく。冷静さを失った運動は、ある転換点から、そのエネルギーを、「正しくないもの」の排除に向けていく。そうすることで、一つの「正しさ」の中で、熱狂したまま共同体感情を維持できる。この排除の力が権力である。

筆者は、歴史上のファシズムやスターリニズムだけでなく、自分の生きてきた中で、大小さまざまな「恐怖政治」を経験してきた。原体験として、疎開時代のいじめ体験について書いた文章がある。だからこその心配だったのだろう。

▼中井久夫『いじめのある世界に生きる君たちへ』【371NA】（北野高校図書館）。これは見事な分析だ。いじめは、他のさまざまな社会の排除現象の原型だ。子どもにも読めるように書かれている。一読を勧める。

⑬　そういう中ではボランティアを組織し、効率をよくしようという行政的発想は、お祭りの雰囲気の中で**読解問題2**祭りの群衆を組織化することが場違いであるように、いかにも場違いであった。行政は「熱く」なってはいけない。例えば、いかに親切な行政といえども、大荷物に難渋しているおばあさんを見かけたら代わってとっさに持ってあげることはできない。そういう立場の行政人が葛藤に苛まれてもふしぎではない。行政には公平性というものがつねに要求されるからである。ところが、ボランティアにとっては、とっさにできる簡単な行為である。この例一つで、行政とボランティアとの間の補い合いの関係がわかるだろう。ボランティアはその場で良いとすることができる。しかし、「やめる」と言えば横からこれを止めることはできない。祭りの群衆と同じ無責任性が潜んでいる。

☆対比が出てきたら、整理しておく。

・行政　　冷静　公平（客観）性　　責任

・ボランティア　熱い　やる／やめるの自由　無責任

読解問題2　「祭りの群衆を組織化することが場違いであるように」とはどのようなことか、説明しなさい。

問いとしては、「祭りの群衆を組織化することは場違いである」とは？だと思う。「ように」は削って考えよう。

☆傍線部延長＋切り身、でいこか。

「そういう中では／ボランティアを／組織し、効率をよくしようという行政的発想は、／お祭りの雰囲気の中で／祭りの群衆を／組織化することが／場違いであるように、／いかにも場違いであった。」

傍線部は比喩。比喩をはずし、指示内容を補うと、

「共同体感情に包まれ、ボランティア活動が熱く盛り上がっている世界では、／ボランティアを／組織し、効率をよくしようという行政的発想は、／いかにも場違いであった。」

これと、

「お祭りの雰囲気の中で／祭りの群衆を／組織化することは／場違いである」

は同形。

祭りはたとえ。祭りのことを聞かれているわけではないので、ボランティアの話として、祭りのたとえを置き換えればいい。とりあえず置き換えると、

「共同体感情に包まれ、熱く盛り上がっているボランティア活動を、／効率よく組織しようという行政的発想は、／いかにも場違いである」ということ。

これでもいいかもしれないけど、ほとんどそのままだ。

「場違い」ってどういうこと？をクリアにしたい。そこをくっきりさせないと、説明したことにはならない。「場違い」って？　ＡはＢにそぐわない。ＡとＢは矛盾してること。じゃ、どこが矛盾してる？

・ボランティア活動は、（熱く）（無責任に）自由にやりたいことをみんなでやっている。

・行政的発想は、（冷静に）（責任をもって）人々を効率よく組織（管理）しようとする。

【解答例】ボランティア活動は、無責任に自由にやりたいことをやるものなのに、行政的発想は、責任ある立場から、人々を効率よく組織し、管理しようとする点で、矛盾しているということ。

「場違い」をなんとかいいかえたい。「そぐわない」「なじまない」「別物である」。この問いは、「場違い」の意味合いを聞く問いだ。他の所はそのままでもいいが、「場違い」はいいかえるべし。

⑭　しかし、熱い世界だけがボランティアの世界ではない。「クール」な（冷めた）世界におけるボランティアは、大震災のときとは別個の場にあり、別個の原動力を必要とする。この課題のほうがはるかに難しい。一般に「クール」な世界におけるボランティアがどう

あるべきかを、私はまだ言うことができない。行政はボランティアを完全に掌握しようとする。どのような行政も職務忠実の原理によってそうなるはずである。しかし、ボランティアセンターといったものによって完全に組織され、行政の毛細管となったボランティアは精神が形骸化する。アメリカのボランティアセンターはモデルにならない。ロサンゼルスのボランティアセンターの「ボランティア」の半数は、裁判所によって「ボランティア」従事の判決を受けた軽犯罪の諸君だった。それはいわば「非自発的（インボランタリー）ボランティア」である。この課題は実践的にしか解けない。次の災害、その次の災害と試行錯誤を重ねてゆくことになるだろう。ただ、行政からみてうまくいったとみえる場合、現場では地団駄を踏み不毛な諍いさえ起こっていることが間々あるだろう。システムが模範的な円滑さで動くのはしばしば末端の苦悩を押しつぶしながらである。**読解問題3** 双方に同じ程度の不満感が残るのが実はいちばんうまく行っている場合であると私は思う。

キーワードが「「クール」な世界におけるボランティア」に変わった。問いは、「「クール」な世界におけるボランティア」をどう機能させるべきか。

「ホット」な方が、自由にやって（自由にやめる）自発的ボランティアであるとしたら、「クール」な方とは、行政によってコントロールされたボランティアである。

災害時、自発的ボランティアだけでやっていくことはできない。どこかで行政でかかわる。平常時は、行政は計画された支援を、必要なだけ実施していればいい。しかし災害のように一時的に大量の支援が必要になった場合、行政だけではまかなえず、また、ボランティアだけでも対応できないことになる。

ボランティアの効率の悪さとは、例えば、支援の偏りになって現れる。そんなにたくさん支援物資を送られても、配付できない、保管できない、とか。あそこで困っている人がいるとしても、ボランティアには危険すぎて近づけない、とか。そんなとき、こっちの人材をあっちへ、とか、計画的な物資の分配とか、予算を立てて、仕事として専門家を呼ぶ、とかいったことが必要になる。

ボランティアの自由さと行政の仕事としての公平性・継続性は、原理が対立するとはいえ、現場にとって両方とも必要なのは明らかである。

読解問題3「双方に同じ程度の不満感が残るのが実はいちばんうまく行っている場合である」とあるが、これはどのような状況であると考えられるか、説明しなさい。

どんな場合か、直接筆者は書いていないが、そこまでの記述から推定する問い。焦点は、「同じ程度の不満感」って何？ということだ。あえて否定的に表現しているのがミソなのではないか。

それぞれの〈満足百パーセント〉って何？と逆に考えてみよう。

ボランティア側は、自発性が完全に保障され、自由にやりたいことをやり、やめたいときにやめられ、自発的自然発生的な人のつながりの中でやりがいを感じている状態。――というところか。

一方、行政側は、自分たちの指導の下、ボランティアも含め、組織を完全に支配し、システムを思い通りに効率よく動かせる状態、がいいよね。

ポイントは、ボランティア側の「自由」、行政側の「支配（管理）」。それぞれが自分たちが望む「自由」／「支配」を、少しずつがまんすること。ボランティアは、ある程度、行政の管理に従う。行政は、ある程度、ボランティアの自由に任せる。そこらあたりに落としどころを見ているわけだ。長短、いろいろな解答例を示す。

【解答例1】ボランティア側は、自発性が完全に保障され、自由にやりたいことをやり、やめたいときにやめられ、自発的自然発生的な人のつながりの中でやりがいを感じている状態が最も望ましく、一方、行政側は、自分たちの指導の下、ボランティアも含め、組織を完全に支配し、システムを思い通りに効率よく動かせる状態を求める。しかし、その両方が満たされることはない。したがって、うまくいっている状況とは、ボランティア側は、自分たちの望む自由を少しがまんし、ある程度行政の管理に従い、一方、行政側は、自分たちの望む支配を少しがまんし、ある程度ボランティアの自由に任せている状況であると考えられる。

【解答例2】ボランティア側は、自分たちの望む自由を少しがまんし、ある程度行政の管理に従い、一方、行政側は、自分たちの望む支配を少しがまんし、ある程度ボランティアの自由に任せている状況。

【解答例3】ボランティアは、ある程度行政の管理に従い、自由を少しがまんし、行政は、ある程度ボランティアの自由に任せ、完全な支配をしない状況。（66字）

■**読解問題**

1　「どうも、そういうふうに人間の心はできているらしい。」とあるが、筆者は、このような人間の心の動きをどのようなものとしてとらえているか、まとめなさい。

2　「祭りの群衆を組織化することが場違いであるように」とはどのようなことか、説明しなさい。

3　「双方に同じ程度の不満感が残るのが実はいちばんうまく行っている場合である」とあるが、これはどのような状況であると考えられるか、説明しなさい。

■**発展問題**　自分のボランティア経験に基づいて、筆者の考えについて意見を述べなさい。

●重要語「ボランティア」＝無償で自発的に社会活動に参加したり，技術や知識を提供し

たりする人，またはその活動。社会福祉，教育，環境保全，保健など，社会全般を対象とする。一般的にボランティアの理念として，自分から行動すること，ともに支え合い協力し合うこと，見返りを求めないこと，よりよい社会の実現を目指すこと，があげられる。日本では 一九六〇年頃から個人の活動が組織化され，ボランティア推進団体が活動するようになり，一九七〇年代から一九八〇年代には高齢化問題や国際社会への関心などから，ボランティア活動が活発に行なわれるようになった。一九五五年の兵庫県南部地震では全国から多くのボランティアが支援に駆けつけたことから，震災が発生した 一月十七日を「防災とボランティアの日」としている。一方で，行政の役割をボランティアが補っている側面もあり，行政とボランティアの連携や行政による調整などが検討課題とされている。